
鍵の剣と守護の扉

神代家家長

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鍵の剣と守護の扉

【コード】

N5643P

【作者名】

神代家家長

【あらすじ】

6つの鍵。6つの扉。そして6人のプレイヤーによる競争と協力のゲーム。

(上) (前書き)

反転・遊戯・リバース・ゲーム・投稿中ですが暇な時間に書いていたら出来てしまったので載せてみます。

(上)

初めにルールを説明しよう。

鍵の数は6つ。そして扉の数も6つ。プレイヤー6人はそれぞれに鍵を一つ所持し、6つの扉をそれぞれ守護する役目を持つ。

プレイヤーは自分の守護する扉を開く事が出来ればクリアとなる。しかし、プレイヤーの持つ鍵と守護する扉の鍵は一致しない。

よってプレイヤーは他の5人の誰かが持つ自分の扉の鍵を奪取、もしくは交渉によって入手するしかない。

と言うような説明を僕は今受けていた。

『更にプレイヤーにはそれぞれの扉に準じた特殊な能力を使用する権限が与えられています』

説明しているのは古臭い合成音声を放つ古臭いスピーカー。何度か話しかけてはみたがスピーカー単体の物らしくマイクがない為此らの声は届かないらしい。

『能力も6つ。『腕力』『敏捷』『知力』『守護』『精密』『幸運』がそれになります。貴方には『守護』の能力が与えられています』

6人全員に同じ内容の説明をしているのかと思っただが、どうやらこれは僕専用の物らしい。無論ここに居るのは僕一人だ。そして僕の背後には当然のようにそびえる大きな扉。

『能力はそれぞれの視点の左下に表示された数字の数だけ使用する事が出来ます』

「数字？」

反射的に視点を左下に向けて本当に数字があったので思わずギョっとして飛びのいてしまった。ちなみに表示された数字は17だっ

た。多いのか少ないのか現時点では分からない。

『それでは貴方に『守護』の御加護があらん事を』

そこで説明が終了し僕はたった一人で薄暗い通路の扉と静寂だけを道ずれにゲームに参加する事になったのだった。

そもそも僕がこのゲームに参加する発端が何だったのかすら分からない。

というか、そもそも僕は一体誰で、一体何処から来て、一体何者だったのか。それすら僕には分からなかった。

記憶喪失？とも思ったが、ひよっとすると僕はこのゲームに参加する為だけに作られたゲームのコマなのかもと思う。

だって自分が思っているほど僕はこのゲームに奇異感を持たないし自分が記憶喪失だと言うのに混乱も起こらない。そもそも視点を左下にむけて数字が普通に見える時点で普通の人間か？と思う。

つまり僕は自分では冷静なつもりで大いに混乱していた訳だ。

「守護！」

とりあえず無意味に叫んでみた。当然何も起こらない。どうやら守護の能力の発動は名前を叫ぶ事ではなかったらしい。

丁度良いので僕は自分の事を『守護のプレイヤー』とでもしておこう。

「守護」。シールド。フィールド。後は、え〜と・・・」

思いつく限りの事を言ってみるが何も起こらない。当然左下の数字も減っていない。

困ったぞ。これではいざという時に何をどうすれば良いのかも分からない。

「能力の使い方くらい教えて行けよな。不親切な」

僕は脱力して扉を背にズルズルと床に座り込む。冷たつ。この床、石で出来てるわ。

冷たさを我慢して座り込み、僕は自分の腰に下がっていた鍵を外して眺める。鍵にはどうやら『幸運』を表すらしい『幸』の文字だ

けが表示されていた。どうやら僕の持つ鍵は『幸運のプレイヤー』の物らしい。

一応と言う感じで守護の扉の鍵穴に差し込んでみたが当然開かない。

「僕の鍵は誰が持つてるのかなあ〜」

ボンヤリと天井を見上げながら僕は特に意味もない思考にふけていた。

ボンヤリしている場合じゃないと分かったのか数時間後の事だった。

「・・・お腹空いた」

当たり前と言えば当たり前前の生理的欲求が僕に振りかかってからの事だった。

困ったぞ。目に見える位置に食料なんて都合の良い物は見当たらないし、そもそもゲームがどれくらいの期間続くのかも分からない。というか、そもそも僕以外に守護の扉に用がある奴なんている訳がないので扉を護る意味もない。つまり扉の前ですごした時間はまさに無駄だった訳だ。

「行くか」

恐ろしく気は進まないが、このままジツとしていたら餓死してしまう。僕は守護の扉から続く3つに分かれた道を前に考える。

常識的に考えて6つの扉があると言う事は6角形に配置されていると想像する。その内説明の順番から考えて僕に隣接するのは恐らく『知力』と『精密』の筈だ。彼らがどういうルートで動いてくるのか知らないが左右の道は危険な気がする。

そういう訳で僕は守護の扉から真っすぐ伸びる道を選択した。

うん。選択してから10分後後悔した。道に迷った。

「迷路じゃん」

僕の想像が正しかったのかどうかも分からないが正面の道を選んだらいくつもの分岐路があって適当に選択していたら完全に迷った。

「何処だよ、ここ」

正直、泣きそうになりながら通路を歩き更なる分岐路で 宝箱を発見した。

「・・・怪しい」

通路の端にあるなら兎も角、分岐路のど真ん中に置いてあるのが超怪しい。

「というか開くのか？」

恐る恐る宝箱に手を掛けてみるが当然のように鍵が掛かっているのか開かなかった。ある意味ほっとして宝箱から手を離してそれが目に入った。

宝箱の横に記された一つの文字。

『幸』

まさかと思いながら僕は腰につるしておいた『幸運の鍵』を宝箱の鍵穴に入れて、ゆっくりと回してみる。ガチャリという音と確かな手応え。

「開いた」

恐る恐る箱を開いてみると入っていたのは服と食料。それら、それらを収納するのに丁度良いリュックだった。

「食料はありがたいけど服は明らかに僕用じゃないな」

多少サイズが違うと言うだけなら兎も角、入っていた服は明らかに女物だった。

「・・・」

下着も。

「単純に考えるなら『幸運のプレイヤー』用って事か。『幸運のプレイヤー』は女性って事かな」

とりあえず服と食料をリュックに詰め込み、少し落ち着ける場所を探す事にする。念願の食料だが道のど真ん中で食べるのは落ち着かない。

更に数時間歩き回っていくつか分かった事がある。

宝箱は通路のあちらこちらに配置されていて、そして6つの種類に分けられていた。今の僕が開けられるのは『幸運の宝箱』のみ。最初に引き当てたのは運が良かった。

実際あの後も4つほど宝箱を見つけたが全て外れだった。単純に推察すれば宝箱には服や食料、それに何かしらの道具が入っていると思われる。武器とは考えたくはないが。

そして重要な問題として、この事実は自分の欲する鍵以外にも狙われる可能性があると言う事を示している。

例え外れの鍵だとしても鍵が多いほど服や食料を手に入れる可能性が多くなる。結果、例え争う必要のない者同士が遭遇しても鍵の奪い合いが行われる事もある訳だ。

状況が変わったのは更に数時間も歩き回った後だった。

「・・・声？」

誰かの声。それも言い争うような声が聞こえてきた。

「・・・」

用心には用心を重ねる必要がある。僕は足音をたてない為に靴を脱いでリュックにしまいそつと声のする方へと歩き出した。

慎重に慎重を重ねたので大分時間を使ったが言い争う声は健在だった。

そつと片目だけを出して覗き見ると二人の男が声の発生源らしかった。

「いい加減にして貰いたいな」

「うるせえ！鍵をよこせ！」

いや。言い争いどころか戦っているようにしか見えない。

身長が高く細身の男に対して、身長どころか身体全体が大きい男が拳を振り上げ　振り下ろす！

「！」

危つく声をあげてしまうところだった。

大男の拳は細身男に当たりはしなかったが背後の石の壁に命中し

てヒビを入れていた。何と言う怪力。

「ちょこまかと逃げやがって!」

「君が『腕力』の能力を持つているように私は『敏捷』の能力を持つている。君の力がいくら強くても当たらんよ」

『腕力』と『敏捷』のプレイヤー。それであるの怪力なのか？

「君と私が争っても無駄だと言う事はそろそろ理解出来たのではないか？それより情報を交換する事を提案するが」

「情報だ？」

「そう。君の能力の数値はいくつになっている？」

「・・・何でそんな事を聞く？」

「検証したい事があるからだ。先だしが嫌というなら私から公開しよう。私の能力数値は現在9となっている。当初は11だったがね」

「・・・俺は7だ。最初は11だった」

「どうやら『敏捷のプレイヤー』の説得に『腕力のプレイヤー』が応じたらしい。

「ふむ。つまり全プレイヤーの初期値は11と言う事か」

それは違う。何故なら僕の初期値は17だからだ。この数値には個人差 正確には能力ごとに違いがあるらしい。

「私はゲームが始まってから直ぐに能力を調べる為に適当に走り回ってみた。予想通り通常よりも早く走れたが10分程で数値が一つ減った」

「それで？」

「それから数時間が経つが数値は一向に元に戻らない。そして君と遭遇して更に一つ数値が減った」

「何が言いたい？」

「つまり。この数値は一度減ったら元には戻らないのではないか？」

「！」

『腕力のプレイヤー』。そしてこっさり聞き耳を立てていた僕の身体が強張る。ゲーム感覚でいたから数値が減っても直ぐ戻ると思っていた。最初に無駄に能力を使ってなくて良かった。使えなかった

んだけど。

「そして、この数値が0になった時に何が起こるか誰も知らない。最悪この数値が我々の命その物であったなら0になったら問答無用でゲームオーバーでもおかしくはない。事は慎重に進めるべきだ」

「……」
「他にも共有出来る情報は共有していこう。私の持っている鍵は『守護の鍵』だ」

「！」

今度は硬直したのは僕だけだった。僕の鍵をもっているのは『敏捷のプレイヤー』か！

「俺の鍵は『知力』だ。残念だったな」

「いや。情報を共有出来る者と遭遇出来ただけでも幸運だ」

「そうかい」

それから更に細々とした事を話し合っていたようだが僕はこれ以上動揺を隠す自信はなかったので早々退散させて貰った。

「あゝ。ビックリした」

驚きの新事実の連続に僕は深々と息を吐き出した。
とりあえず分かっている事実だけを整理すると。

『腕力』 『知力』 『敏捷』 『守護』 『守護』 『幸運』

となるから残っている『知力』 『精密』 『幸運』の3人が『腕力』 『敏捷』 『精密』を持っている訳だ。

それに能力は使い捨ての可能性があるから節約の必要ありと。

「ん？待てよ」

『腕力』は文字通り怪力になっていたし『敏捷』は凄いい速さで動けるようになるらしい。それなら『守護』は？

「ひょっとして攻撃されないと発動しないとか、そういう感じの能力か」

僕は嘆息しながら歩き続け、何度目かになる宝箱を発見していた。
「お」

発見した宝箱の横には『幸』の文字。ラッキーだ。僕は早速宝箱の鍵穴に『幸運の鍵』を差し込んで。

「動かないで」

「・・・」

何者かに背後を取られていた。

「え〜と・・・」

「可能性は低かったけれど、こうやって『幸運の宝箱』を見張って居れば『幸運の鍵』を持つプレイヤーと出会えると思っていたわ」

こいつ『幸運のプレイヤー』か。凄い忍耐　というより『幸運』の能力によりものだろう。

「一つ聞きたいんだけど」

「何？」

「ここで何時間待っていたのか知らないけど、その間に能力数値が激減したんじゃないか？」

「・・・それが何？」

『敏捷のプレイヤー』は10分ほどで1減ったと言っていた。数時間も待ち伏せで『幸運』を使い続けていたなら減った数値は相当な物だろう。

「『幸運の鍵』が手に入るなら数値が0でない限り問題ないですよ。さあ。鍵を渡しなさい」

「い・や」

「このナイフが見えないの？」

確かに僕の首筋には先ほどからナイフがあてがわれている。

「僕が何のプレイヤーなのか確認もせずに動くなんて少し不用心じゃないか？」

「関係ないわ。この距離なら貴方が何の能力を使うよりも早く貴方を仕留める事が出来る」

嘘に決まっている。『幸運のプレイヤー』は明らかに焦っていた。

理由？勿論、自分の能力数値の残高が心もとないからだ。だから焦って僕が何のプレイヤーかも確認せずに行動を起こした。

そして彼女にとって僕は今最も出会いたくないプレイヤーだった訳だ。

「君には僕が何のプレイヤーに見える？」

「さあね。目立つ特徴もなさそうだし『精密のプレイヤー』あたりかしら」

「勿論、希望的な観測だよね？」

「・・・」

例えどんなプレイヤーであっても零距离でナイフを突き付けられ
ては防ぎようがない。唯一つ　そう。『守護のプレイヤー』以外
は。

「この何処が『幸運』なのよ。不幸じゃない」

「君の幸運は『幸運の鍵』を持つ僕を見つけ出した時点で君が止め
たんだろ？それに文句を言うのは筋違いだ」

「くー！」

彼女は激情に任せてナイフに力を込めて　。

「やめておきなよ」

「・・・」

僕の言葉にピタリと動きを止めた。

「僕の能力が発動すれば君は唯じゃ済まないよ。死にたくはないか
ら必死になっていたんだろ？」

「・・・」

勿論ハツタリだ。『守護』の能力が発動したらどうなるかなんて
僕だって知らない。そもそも本当に発動するのかすら知らないのだ
から。

「じゃあ、どうすればいいのよ」

「協定を組まないか？」

「協定？」

「君と同じように僕も『守護の鍵』が欲しい。それを君が手伝って

くれて『守護の鍵』を手に入れた暁には『幸運の鍵』を君に譲渡しよう」

「・・・信用出来ないわ」

勿論そう返してくるだろう。だから。

「これを君にあげるよ」

「あ」

僕はリュックに入れていた彼女用の服を彼女に進呈した。数時間も隠れていた為に彼女の服は大分汚れていた。女性として換えの服は喉から手が出るほど欲しかっただろう。

「い、良いの？」

「勿論。僕が持つていても仕方がない物だからね。それと・・・」

未だに『幸運の鍵』を刺したままだった宝箱の鍵を開けて宝箱を開く。中には予想通り彼女にあつらえた道具が入っている。

「これも君の物だ」

「・・・」

宝箱の中身を受け取り彼女はしばし沈黙して。

「わかった。貴方と協定を結ぶわ」

僕と彼女は協力関係を成立させた。

(下)

「とりあえず協定関係を結んだ以上、私が持っている鍵を公開するわ」

「『敏捷の鍵』だろ？」

「……」

僕の返しに彼女 『幸運のプレイヤー』は沈黙する。別に難しい事ではなかった。

『腕力』 『敏捷』 『知力』 『守護』 『精密』 『幸運』の順番に公開されて

『腕力』 『知力』 『敏捷』 『守護』 『守護』 『幸運』

たった。

この図式で『幸運』の彼女が持つ可能性のある鍵は『腕力』 『敏捷』 『精密』の3つだが法則として右二つにずれた鍵を持っているとすれば彼女が持っているのは『敏捷』と言う事になる。

「どうして分かったの？」

「君に出会う前に『腕力』と『敏捷』のプレイヤーが会話しているのを盗み聞いた。彼らが何の鍵を持っているかも聞いたのである程度法則が掴めた」

「ふん」

「その意味で僕が出会っていない『知力のプレイヤー』は『精密の鍵』を。『精密のプレイヤー』は『腕力の鍵』を持っていると思われる」

「別にそれはどうでもいいわ。問題なのは貴方の鍵を持っているのは誰なのかと言う事」

「『敏捷のプレイヤー』だ」

「……え？」

僕の言葉に呆気に取られる彼女。というか、ここまで話したのだからある程度予想を付けられてもよさそうなものなのに。

「それじゃ貴方は自分の鍵を持っているプレイヤーと遭遇しておきながら何もせずに逃げ出してきちやったの？」

「『腕力のプレイヤー』と一緒に居たと言っただろう。あの状況だと2対1の戦いになった。いくらなんでも二人も同時に相手に出来ないよ」

「う。そっか」

本当は彼女の言うとおりでビビって逃げたのが見得を張っておく。

「そう言えば君の能力数値は後いくつ残っているの？」

「私の方はあと13よ。貴方は？」

「僕は16。最初は17だった」

嘘。僕の数値は17のまま変わっていないが一応彼女には能力未使用と知られたくなかった。

「そんなに低いのか？私は最初31だったわよ」

「……」

多い。やはりプレイヤーの種類によって数値が大きく異なるようだ。

「盗み聞いた話だと『腕力』と『敏捷』のプレイヤーの初期値は11だったらしい」

「低いわね」

「でも用途は強力だ。『腕力のプレイヤー』は素手で壁にヒビを入れてたし『敏捷のプレイヤー』はそれを余裕で回避していた」

「ちよつと能力に差があり過ぎるんじゃない？」

「その分、君は数値を多めに持っていた。明確に数値化は出来ないけど恐らく公平に分配されていると信じたいな」

「貴方を探す為に数値を殆ど使いこんだ私は明らかに不利じゃない」
「その為に僕と組んだんだろう？大丈夫だよ」

不安そうな彼女だが僕が自信満々に言うと少しだけほっとしたよ

うだった。ハツタリも使いどころだ。

「それで、これからどうするの？」

「『敏捷のプレイヤー』を探す」

「そっか。それもそうね」

「ちなみに彼を探す事には僕の鍵を手に入れるのとは、もう一つ違う価値がある」

「？」

「僕の見つけた法則によれば6人のプレイヤーは2つのグループに分けられる。『腕力』『知力』『精密』と『敏捷』『守護』『幸運』だ」

「どういう意味があるの？」

「分からないか？『敏捷』は『守護の鍵』を持っていて『守護』は『幸運の鍵』を持っていて『幸運』は『敏捷の鍵』を持っている。

つまり僕ら3人が出会えば3人とも正しい鍵を手に入れる事ができて禍根が残らないで済む」

「あ」

「勿論、今持っている鍵は失うが欲しい鍵を手に入れる為なら決して高くはないリスクだ」

「ああ。だから私を味方に引き込んだのね」

「そういう事」

彼女を敵に回すより味方に引き込んだ方が『敏捷のプレイヤー』の交渉にも説得力が出ると言う物だ。

「問題なのは『敏捷』以外の3人と遭遇した場合。それと『敏捷』が鍵を奪われてしまった場合だ」

「そいつは面白れえな」

「！」

唐突に聞こえてきた声に慌てて振り返ると『腕力のプレイヤー』が拳を振り上げて　あ、ヤバ。

「くたばれ」

僕の顔面に拳が突き刺さって　。

「ぐお！」

『腕力のプレイヤー』が跳ね飛ばされて壁に叩きつけられていた。

「あゝ。ビックリした」

「て、てめえ」

壁を背に立ちあがり僕を睨みつけてくる『腕力』を無視して僕は自分の能力数値を確認する。予想通り16になっていた。こうなる訳か。

「やめときな。お前は僕とでは相性が悪すぎる。僕の数値に余裕のある段階で仕掛けても品切れになるのはそっちが先だよ」

「なら・・・！」

彼は僕の言葉で当然のように当然の行動に出る。

「ちよー！」

彼女 『幸運のプレイヤー』に対して攻撃を仕掛けてきた。彼女の『幸運』も使い方次第では『腕力』に対抗出来るかもしれない。折角の幸運の数値をここで使いきってしまうのは面白くない。

「ぐあー！」

だから僕が前に出る。

『腕力のプレイヤー』は間に割り込んだ僕に再び攻撃を仕掛けた事で弾き飛ばされて壁に叩きつけられる。数値は残り15。

「てめえ！」

「彼女は僕の協力者だ。むざむざ攻撃されるのを黙って見ている訳ないだろう？」

そして僕はある程度の予測を立てていた。

彼は『腕力のプレイヤー』だ。身体も大きく力も強い。しかしあくまで彼は『腕力のプレイヤー』。『守護のプレイヤー』は僕だ。つまり彼に見た目以上の防御力がある訳ではない。

彼自身の『腕力』の能力を2度も弾き返されて平気な筈がない。

「あ。ちよつと！」

僕が『腕力のプレイヤー』に無防備に近付いて行く事に対して『幸運』の彼女は不安そうな声をあげてくるが心配ない。

「へ。自分から殴られにきやがったか」

「ハツタリだ。もう腕を振り上げる力も残ってないだろう？」

「・・・」

「そして例えもう一度腕を振り上げたとしても次は無い。2回でその有様なのに次に同じ事をすれば命に関わるぞ」

「勝手に決めるんじゃない」

「だったら動いてみるよ」

「！」

僕が屈みこんで『知力の鍵』を取り上げるのを『腕力のプレイヤー』は黙って見ているしかなかった。

「返して欲しければ『敏捷のプレイヤー』を僕の前に連れてこい。お前の手持ちの食料が尽きる前に」

「ち、ちくしょう」

肩を押すと『腕力のプレイヤー』は何の抵抗も出来ずに壁を背に床に倒れる。やはり相当無理をしていたのだろう。

「余計な鍵を手に入れてしまったな」

あの場面では必要な事だったから取り上げてみたが正直この『知力の鍵』は争いの種を呼ぶ物だ。出来るなら早々に『腕力のプレイヤー』に返したい。

「あ、あの・・・」

「ん？」

「ありがとう。護ってくれて」

「君に怪我がなくて何よりだよ」

とりあえずそう言ってほほ笑んでみた。本当は『協力関係なんだから助けるのは当たり前』とでも言って良かったのだけど彼女にはこう言った方が効果的に思えたから。

事実、彼女は照れてモゴモゴしている。扱いやす。

「お」

そうこう言って歩いている内に新しい宝箱を発見した。僕達は既

に3つの鍵を持っている訳で開けられる可能性は2分の1だ。

確認すると宝箱の側面には『知』の文字。『知力の宝箱』だ。

「気は進まないが開けてみよう」

一応彼女のように待ち伏せしていないか確認してみるが特に周囲に誰かいるような事は無かった。

そうして開いた宝箱には予想通りに食料と服。それは問題ないのだが。

「また女物か。『知力のプレイヤー』も女性って事か」

いつになったら僕が着られる服が手に入るのやら。

「このサイズなら私も着られそう」

「そ、そうかな？」

確かに服をあてがう背丈は問題なさそうだが。

「何？」

「・・・」

問題になるのは胸囲 胸の部分が随分ときつそうだった。『幸運のプレイヤー』は良く見れば結構なスタイルの持ち主だ。

というか逆に『知力のプレイヤー』の胸元が寂しすぎる気がする。本当に女性か？

想定した『知力のプレイヤー』と遭遇したのは数時間後の事だった。

僕と『幸運のプレイヤー』は『敏捷のプレイヤー』を探して歩き回っていたのだが十字路に差し掛かった時にバツリ見知らぬ二人組に遭遇した。

「あら」

この時点で僕が顔を知らないプレイヤーと言ったら『知力』と『精密』しか考えられない。そして僕は『知力』が女性である事も掴んでいた。

その意味で遭遇した二人が男女であった事からどちらがどちらなのかも直ぐに分かった。

「私達だけかと思っただけでしたが、ちゃんと組んでいるプレイヤーが他にも居たのね」

予想に反してゴスロリ服に身を包んだ『知力のプレイヤー』と思わしき彼女が僕達を見て目を丸くしていた。

「どうする？ 排除するかい？」

それと同時に手に持った物 拳銃を僕達に向けてくる背の高い

男。恐らくは『精密のプレイヤー』。

「拳銃っていくらなんでも反則だろう」

「『精密の宝箱』に入っていたのだから文句なら用意した奴に言ってくれ」

なるほど。『知力』と組んでいる以上『精密の宝箱』を開ける事も可能な訳だ。しかし拳銃とは思わなかった。

「『精密のプレイヤー』に拳銃を持たせれば100発100中か？」

「そういう事だ」

「でもリスクもあるだろう。拳銃一発撃つごとに能力数値1消費。違うか？」

「・・・」

『精密のプレイヤー』は黙りこむが考えてみれば当たり前の話だ。拳銃なんて武器で100発100中。公平に振り分けられた能力値でリスクが無い訳がない。

「相手が二人なら二発で十分だ」

「そうかい」

僕はさりげなく移動して『幸運のプレイヤー』の盾になる位置で陣取る。

「止めておきましょう。彼は恐らく『守護のプレイヤー』よ。全プレイヤー中、攻撃力を持たない反面、無敵に防御力を必要回数行使出来る存在。彼が貴方の弾丸を何回防げるのか未知数だけど貴方の数値を上回った場合一気に不利になるわ」

「それ以前に僕を攻撃しても両者に得なんて無いだろう」

「そうね。貴方が本当に『守護のプレイヤー』であるなら私達に貴

方を攻撃して得られるメリットは無いわ。数値が擦り減らされるだけ攻撃するだけ無駄」

「流石『知力のプレイヤー』。頭が回るね」

まあ。だからこそなんだけどね。

「ちなみに僕はこんな物を持っているんだけどね」
「！」

僕の示した『知力の鍵』に流石に彼女も硬直して表情を無くす。

「僕が襲いかかってきた『腕力のプレイヤー』から取り上げた物だ。これがあれば君達が持つ『腕力の鍵』が余分になる。それとこの鍵を交換しても良い」

「勿論。無条件ではないわよね？」

「僕達は今『敏捷のプレイヤー』を探している。彼を僕達の前に連れてきてくれたなら鍵を交換しようじゃないか」

「良いでしょう。条件を飲むわ」

ほらね。頭が回り過ぎるからメリットとデメリットを計算出来過ぎる。今僕の鍵を奪うというリスクよりも事情を説明して『敏捷のプレイヤー』と交渉する方がリスクが少ないと判断したのだ。

「それじゃ期待してるよ」

そして僕は『幸運のプレイヤー』を促して彼女達の前から立ち去った。

「後は待つだけだな」

「え？」

「『知力』と『精密』のプレイヤーの協力は取り付けた。『腕力のプレイヤー』も僕達の為に動くしかないし『敏捷のプレイヤー』なら何の問題もない。今の僕達なら誰に遭遇しても問題ないだろ？」

「あ。そっか」

正確に言うと『腕力のプレイヤー』が復讐に動かないとは限らないし『敏捷のプレイヤー』が素直に話に乗ってくれるかどうかも分からない。けどだからこそだ。だからこそ『幸運のプレイヤー』で

ある彼女が切り札になる。

しかし彼女の幸運は僕の予想を遙かに上回った。

「あらら」

『敏捷のプレイヤー』が僕達の前に現れた時、僕の予想外の光景に流石に目を丸くして驚いた。

『敏捷のプレイヤー』を連れてきたのは『腕力』『知力』『精密』の3人のプレイヤーだったからだ。

「どういう経緯があったのか知らないけど、まあ良いや」

僕は当初の予定通り『敏捷のプレイヤー』に視線を合わせる。

「僕と『幸運のプレイヤー』は『敏捷』と『幸運』の鍵を持っている。貴方の持つ『守護の鍵』を合わせれば3人に欲しい鍵が揃う。交渉を受け付けてくれるか？」

「無論だ。その為に私は来たのだから」

予想よりもずっとスムーズに、僕は自分の鍵を『幸運のプレイヤー』へ。『敏捷のプレイヤー』は僕へ鍵を渡してくれた。

「後は・・・」

僕は『腕力のプレイヤー』から取り上げた『知力の鍵』を彼に返す。

「ち」

彼は舌打ちしながらもその鍵を『知力のプレイヤー』へ。そして『知力のプレイヤー』は『精密のプレイヤー』へ。『精密のプレイヤー』は『腕力のプレイヤー』へ。

「これで6人全員が自分の鍵を手に入れた事になる。後は迷路を踏破して自分の扉へと戻り扉を開ければクリアだ」

6人全員が頷き、そして6人全員が同時に背を向けて歩き出した。もう言葉はいらない。

正直な話をすれば運が良かったのだろう。

一歩間違えれば血みどろの殺し合いになってもおかしくなかったゲーム。それを唯のゲームのまままで終わらせる事が出来た。

勿論、自分の力だけの賜物とは思わない。『幸運のプレイヤー』である彼女を初期段階で味方に出来た事が大きかった。

彼女は何も言わなかったけれど、きっと何度も僕を助けてくれたいた。

このゲームにもしも勝者なんて者がいたなら、きっとそれは『彼女』にこそ相応しい。

(下) (後書き)

なんだか中途半端に感じるかもしれませんが数時間で完成させた作品なので、こんなものと思ってくださいなれば。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5643p/>

鍵の剣と守護の扉

2010年12月18日09時55分発行